

ソロモンへ嫁した「ファラオの娘」をめぐる問題について

— 前1千年紀エジプトの衰退史観再考の視点から —

藤井信之

はじめに

旧約聖書の列王記には、ソロモンに嫁いだ「ファラオの娘」に関する記述が5箇所にある¹⁾。近年では旧約聖書の記述の信憑性に対して慎重な態度を表明する研究者が増える傾向にあり、以前はこれらの記述の信憑性もあまり疑われていなかったが、近年では「ファラオの娘」に関する記述を疑う研究者もある²⁾。しかし本論は、こうした記述の信憑性の問題とは違った問題関心から、ソロモンに嫁いだ「ファラオの娘」に関する記述を取り上げたいと考える。ソロモンに「ファラオの娘」が嫁いだという記述は、第3中間期のエジプト（前1069-715年）³⁾が衰退していたことの証としてしばしば言及される⁴⁾。それは、繁栄を極めていた新王国時代（前1550-1069年）には決して王女を外国へ降嫁させることのなかったエジプトが、この聖書の記述から第3中間期には王女を外国へ降嫁させたと考えられることに拠っている。果たしてこの王女の外国への降嫁という出来事は、本当に当時のエジプトの衰退を示しているといえるのであろうか。本稿ではこの点を検討することによって、前1千年紀エジプトの衰退史観再考の一端としたい。従ってこの研究は、聖書学の立場からの研究ではなく、エジプト学の立場からの研究ということになる。

ここで前1千年紀エジプトの衰退史観の問題についても簡単に説明しておきたい⁵⁾。一般的な古代エジプト史の理解では、エジプトは新王国時代までは繁栄したが、その後は緩やかに衰退しマケドニアのアレクサンドロス3世（大王）に征服されることになったとされる。この長い衰退期間は約700年にもなる。人類の歴史の中で、これほど長い期間を衰退期とする歴史は他にないの

* 2度目以降は著者名と出版年で引用する。

1) 列王記上 3.1; 7.8; 9.16; 9.24; 11.1

2) たとえば、Redford, D. B. (1992), *Egypt, Canaan, and Israel in Ancient Times*, Princeton U. P., pp. 310-311; Schipper, B. U. (1999), *Israel und Ägypten in der Königszeit*, Freiburg, pp. 84-107; Ash, P. S. (1999), *David, Solomon and Egypt: A Reassessment*, Sheffield, pp.112-119などを挙げるができる。

3) この時代の絶対年代は未だ確実とは言い難い状況にある。本稿では差し当たり Shaw, I. (ed.) (2000) *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford U.P. に従っておく。また本論では、第3中間期を第21王朝から第24王朝までとしている。

4) たとえば以下の研究や概説を挙げるができる。Schulman, A. R. (1979), "Diplomatic Marriage in the Egyptian New Kingdom," *Journal of Near Eastern Studies*, Vol. 38, pp. 177-193; Robins, G. (1993), *Women in Ancient Egypt*, London, p.32; Kitchen, K. A. (1997), "Egypt and East Africa," in Handy, L. K. (ed.), *The Age of Solomon*, Leiden, pp. 107-123, esp. p. 118; Mysliwiec, K. (2000), *The Twilight of Ancient Egypt*, Ithaca, p. 41; Taylor, J. (2000), "The Third Intermediate Period," in Shaw, I. (ed.), *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford U.P., pp.330-368, esp. p. 333; Malamat, A. (2001), *History of Biblical Israel*, Leiden, pp. 221-223 [ただしこの部分の初出は1963年]; ジョン・ブライト (1968) 『イスラエル史 (上巻)』聖文舎、282頁 [原著は1959年]; P. K. マッカーター・ジュニア他著 (1993) 『最新・古代イスラエル史』ミルトス、187頁 [原著は1988年]。

5) この問題については、藤井信之 (2006) 「エジプトは『折れた葦』か?」関西学院大学西洋史学研究室編『西洋世界の歴史像を求めて』関西学院大学出版会、35-53頁で詳しく論じた。

ではないだろうか。まるで五賢帝時代（96-180年）の終焉から1453年の滅亡までをローマ帝国の衰退と捉えたギボンの『ローマ帝国衰亡史』を彷彿とさせる史観である。しかし今やビザンツ学が成立し、東西分裂以降の東の帝国は、盛衰を繰り返す一つの帝国の歴史として見直されている。存立の条件が異なった五賢帝時代とビザンツ帝国の最盛期とも目されるバシレイオス2世（963-1025年）の時代を比較して、後者の時代を衰退期とする者はもはやいないであろう。しかしエジプト史では、今なお新王国時代までのエジプトと比較して前1千年紀のエジプトを衰退期と捉えているのである。ナイル河畔の内も外も、存立の条件が異なっていたエジプトを比較して繁栄や衰退の評価を下すことには問題が多い。本論でも、この点に注意を促すことになるであろう。

また前1千年紀のエジプトを衰退期とする史観は、研究を主導してきた西洋人の問題意識から生じたものとも考えられる。エジプト史はギリシア史やキリスト教史の前史として位置づけられた。前1千年紀については、西洋の起源と位置づけられたギリシア世界の興隆と繁栄が中心的なテーマとされ、またキリスト教の成立に深く関わるイスラエル人らの文化的発展も重要視された。こうして形成された前1千年紀の歴史像は西洋世界の興隆を説明するものとなり、それと相俟って他者と位置づけられたオリエント世界の停滞と衰退が説かれることになった。前1千年紀エジプトの衰退史観は、こうした西洋中心史観に影響された面が多々あるのではないだろうか。前1千年紀エジプトの衰退史観の再考は、西洋史や世界史の西洋中心史観を克服する一助にもなると考えられる。本稿は、そのささやかな試みの一端でもある。

1. 旧約聖書の記述とエジプト側の史料

（1）旧約聖書の記述とその解釈

はじめに旧約聖書の記述を確認しておこう。以下のように列王記上の5箇所ソロモンへ嫁した「ファラオの娘」の記述がある。邦訳は、旧約聖書翻訳委員会訳（2005）『旧約聖書Ⅱ 歴史書』岩波書店に拠った。

「ソロモンは、エジプトの王ファラオと姻戚関係を結び、ファラオの娘を娶った。そして彼女をダビデの町に連れて来て、彼の宮殿、ヤハウエの神殿、エルサレムの周りの城壁の造営が終るまで、そこに留まらせた。」（列王記上3.1）

「彼が住まいとした建物はこの広間の後ろの庭にあり、これと同じ造りであった。またソロモンは、妻に迎えたファラオの娘のために、この広間と同じ建物を造った。」（列王記上7.8）

「エジプトの王ファラオが上って来てゲゼルを占領し、火で焼き払い、その町に住んでいたカナン人を殺した、これをソロモンの妻となった自分の娘に結婚の贈り物として与えた。」（列王記上9.16）

「ファラオの娘が、ダビデの町からソロモンが彼女のために建てた家の上ってから、ソロモンはミロを建てた。」（列王記上9.24）

「ソロモン王は多くの外国人の女を愛した。すなわち、ファラオの娘、モアブの女、アンモンの女、エドムの女、シドンの女、ヘト人の女などで、」（列王記11.1）

以上がソロモンへ嫁した「ファラオの娘」に関する列王記の記述のすべてである。ただ実は同じ頃にもう一人、エジプトの王族女性がパレスティナの君侯に降嫁したことが記されている。列王記によると、ダビデがエドムを撃ったとき、エドムの王族ハダドはエジプトの宮廷に亡命し、そこで王妃の姉妹を妻として与えられたという（列王記上11.15-19）。あわせてここで紹介しよう。

「ハダドは、ファラオに非常に気に入られた。ファラオは自分の妻、王妃タフベネスの妹を妻として彼に与えた。」（列王記上11.19）⁶⁾

このように列王記では同じ頃に二人のエジプト王族女性がパレスティナの君侯に降嫁したことを伝えているのである。このなかで、エジプト史研究との関わりで特に重要となるのは、列王記上9.16であろう。ソロモンへ娘を嫁がせたファラオは、パレスティナのゲゼルを攻略し、この地を娘の持参財としたという。この記述の歴史的信憑性を疑わない研究者らは、このファラオを第21王朝後半のファラオと考え、サアメンかパセバカエンニウト2世であろうとする⁷⁾（表1参照）。それは、列王記がソロモンの次の王レハブアムの治世5年にエジプト王シシャクがエルサレムを攻撃したことを伝えているからである（列王記上14.25）。列王記の記述を信じる限り、ソロモンへ王女を嫁がせたファラオはシシャクより前に在位したことになる。列王記に登場するシシャクは、第22王朝初代のシェションク1世に比定されている。本論の課題から逸れるので、ここではこれ以上詳論しないが、このエルサレム攻撃の記述と関連すると考えられるエジプト語史料も知

表1. 第21王朝のエジプト王（註3の書物に拠る）

ネスバネブジェド	前1069-1043年
アメンエムネスウト	前1043-1039年
パセバカエンニウト1世	前1039-991年
アメンエムオベト	前993-984年
大オソルコン	前984-978年
サアメン	前978-959年
パセバカエンニウト2世	前959-945年
第22王朝	
シェションク1世	前945-924年

*パセバカエンニウトはプスセンネスというギリシア語読みで表記されることが多い。
ここではエジプト語読みで表記している。

6) タフベネスは人名ではなく、エジプト語で「王の妻」を意味するタ・ヘメト・(パ)・ネスウト (*t3 hmt (p3) nswt*)、が訛ったものと考えられる説がある。Cf. Kitchen, K. A. (1996³⁾) *The Third Intermediate Period in Egypt*, Warminster, p. 274, n.183; Černý, J. (1975), “Egypt from the Death of Ramesses III to the End of the Twenty-First Dynasty,” in Edwards, I. E. S. et al. (eds.) *The Cambridge Ancient History*, Vol. II, Part 2, p. 656, n.2.

7) サアメンと考える研究者が多い。たとえば Green, A. R. (1978), “Solomon and Siamun: A Synchronism between Early Dynastic Israel and the Twenty-First Dynasty of Egypt,” *Journal of Biblical Literature*, Vol. 97, pp. 353-367; Kitchen, K. A. (1996³⁾), pp. 280-283; Malamat, A. (2001), p. 224などを挙げることができる。タニスの遺跡の発掘者ピエール・モンテは、初めはサアメンと考えていたが、後にパセバカエンニウト2世と考えるようになった。Montet, P. (1941) *Le drame d’Avaris*, Paris, pp. 195-196（サアメン説）；ピエール・モンテ（1982）『エジプトと聖書』みすず書房、36-37頁（パセバカエンニウト（訳書ではプスウセンネスとなっている）2世説：原書は1959年出版）。

られている⁸⁾。シェションク 1 世の在位は、前10世紀の第 3 四半期のことであったと考えられる(表 1 参照)。従ってエジプトの王族女性がパレスティナの君侯に降嫁したのは、前10世紀の第 2 四半期から中葉にかけてのことということになる。それは第21王朝期の後半にあっている。ソロモンの義父としてサアメンやパセバカエンニウト 2 世の名が挙がるのはこうした理由による。こうして列王記の記述を信じるなら、およそ次のような経緯を考えることができることになる。第 21 王朝後半のエジプト王サアメンかパセバカエンニウト 2 世は、パレスティナへ遠征しゲゼルを攻略した。しかし新王国時代のように強力な国家ではなかったエジプトは、王女を嫁がせることによってソロモンと同盟を結んだ。

しかしソロモンへ王女が嫁いだ時期とシシャクのエルサレム攻撃は、比較的近接した時期のことであったかもしれない。それゆえ列王記にソロモンの義父の名は記されていないが、あるいはそれもシシャクであったかもしれない。このような考えに立つ研究者の一人ニーマンの研究⁹⁾は、第 2 章で論じるように本論とも関連があるので次にその所説を紹介する。

ニーマンは、列王記の記述の精度はともかくとして、ファラオのパレスティナ攻撃や王女の降嫁といった伝承が存在し、それらが列王記の記述に含まれた可能性はあるとする。そしてソロモンはシェションク 1 世時代の人物で、ゲゼルを攻略したのもシェションク 1 世だったとする。パレスティナ戦役でパレスティナをおさえたシェションク 1 世は、エジプトの伝統的な征服地支配の方法に従ってパレスティナの君侯を臣下とし、征服地を治める総督とした。ニーマンは、ソロモンはその中の一人であったとする。ファラオが外国へ王女を降嫁させた例は他に知られないが(この点は本論でも第 2 章で論じる)、ソロモンへ嫁した「王女」は宮廷の有力家系出身ではなく、エルサレムの側で宣伝目的のために事実と異なって「王女」とされただけかもしれない。あるいはシェションク 1 世は伝統的なエジプト人の王ではなくリビア人の王であったので、伝統的ではない手段を用いたのかもしれない。ニーマンはおよそこのように論じている。この説に従えば、ゲゼルの攻略もエルサレム攻撃もシェションク 1 世による一連のパレスティナ戦役のこととなり、これによってパレスティナがエジプトの宗主権下に入り、総督となったソロモンは「王女」であったかどうか不明だがエジプト人女性と結婚した、ということになる。このようにニーマンの諸説は、先に示した列王記の記述を信じる歴史像とは異なったものとなっている。

いずれにしても、まず問題となるのは列王記の記述を信じる事が出来るか否かである。このため同時代のエジプト側の史料の検討が必要となってくる。

(2) エジプト側の史料とその解釈

次に一次史料となるエジプト側の史料を検討する。まず現時点で明らかなことは、ソロモンへ嫁した「ファラオの娘」に関する列王記の記述は、エジプト語文字史料によってはその信憑性が証明されないということである。つまりエジプト語史料には、ソロモン王の名も、パレスティナへ降嫁した王女のこと、ファラオがゲゼルを攻略したことを伝える確かな碑文も¹⁰⁾、今のとこ

8) カルナク神殿の「ブバスティス期の門」に描かれた戦勝記念レリーフ、メギッド出土のステラ断片、カルナク神殿出土の戦勝碑(かなり破損している)などがある。Cf. Wilson, K. A. (2005) *The Campaign of Pharaoh Shoshenq I into Palestine*, Tübingen, pp. 48-65, 68-74. この遠征に関係した諸都市が「ブバスティス期の門」のレリーフに挙げられているが、そのなかにエルサレムを確認することはできない。欠損部に記されていたのか、もともと記されていなかったのか、今のところ不明である。Cf. Wilson, K. A. (2005) pp. 101-133. またこのパレスティナ遠征については Kitchen, K. A. (1996³⁾, pp. 432-447 も参照。

9) Niemann, H. M. (1997), "The Socio-Political Shadow Cast by the Biblical Solomon," in Handy, L. K. (ed.), *The Age of Solomon*, Leiden, pp. 252-299, esp. pp. 276, 286-287, 296-299.

10) Wilson, K. A. (2005), pp. 105-106.

る確認されていないのである。従って列王記の記述は、同時代史料から証明されないということになり、参考史料ということになる。それでは、列王記の記述を傍証するような史料はないのであろうか。そこで以下では、第21王朝期のエジプト王がパレスティナに遠征したかもしれないと考えさせる史料を検討する。列王記のゲゼル攻略の記述と関連するかもしれないからである。

最も注目されている史料は、ナイル東部デルタのタニスの遺跡で発見されたサアメン王のレリーフである。このレリーフは敵を討ち据えるサアメン王を描いたもので、王に討たれている敵が双斧を持っていることから、この敵はペリシテ人と考えられた。そして列王記上9.16のゲゼル攻略の記述と関連付けられ、このレリーフはサアメン王がパレスティナへ遠征した証拠とされた¹¹⁾。しかし敵を討つエジプト王のモチーフは、秩序を維持する王という王権の重要なイデオロギーをプロパガンダする伝統的なモチーフであって、王朝開闢以来用い続けられたものである¹²⁾。表現された戦闘が実際にあったのかどうかは定かでない。従ってこの史料はサアメン王がパレスティナへ遠征した可能性を示唆するものではあるが、その治世におけるパレスティナ遠征の存在を断定できるほどの証拠ではないといえる¹³⁾。

タニスで発見された第21王朝第3代の王パセバカエンニウト1世の銘文もパレスティナ遠征を示唆するものとして取り上げられることがある¹⁴⁾。タニス3号墓に埋葬されていたウェンジェバウエンジェドの副葬品の一つに、パセバカエンニウト1世を「敵を蹴散らすことによって諸都市を攻略する者」と形容する銘が刻されている¹⁵⁾。また同じ3号墓出土のパセバカエンニウト1世自身の副葬品にも戦闘を想起させる二つの刻銘がある。一つには「神々の王アメン・ラー〔神〕によって言われし言葉。汝が汝の敵の頭を打ち据えたとき、私は汝に勝利と征服を授けた」とあり、もう一つには「偉大なるムウト〔女神〕、アシエルの女主人、ラーの目、夷狄の女主人によって言われし言葉。汝が汝の敵の頭を打ち据えたとき、私は汝の腕を力強くさせ、勝利と征服を確固たるものとした」とある¹⁶⁾。いずれの銘文とも、その後パセバカエンニウト1世の名が刻されている。確かにこれらの刻銘は、パレスティナへの遠征を想起させる。しかし王の名を導き出す形容辞、あるいは王のための讃辞に過ぎない可能性も多分にあり、やはり先のサアメン王のレリーフと同様、パレスティナ戦役があったことを証明するほどに確かな証拠とはならないであろう。

タニス3号墓に墓室が準備されたウェンジェバウエンジェドとアネクエフエンムウトはパセバカエンニウト1世に仕えた人物と考えられる。そしてこの両者が将軍号を持つことから、この時代のエジプトの好戦的性格が指摘されている¹⁷⁾。確かに第3中間期には数多の将軍が史料より確認されている¹⁸⁾、それらの多くは地方を治める軍政官的な性格を持つものであった¹⁹⁾。従って

11) Montet, P. (1941), pp. 195-196, fig. 58 ; Montet, P. (1947) *Les constructions et le tombeau d'Osorkon II à Tanis*, Paris, pp.35-36, pl. 9A ; Černý, J. (1975), pp. 656-657; Kitchen, K. A. (1996³), pp. 280-281; Malamat, A. (2001), p. 224などを挙げるができる。

12) Hall, E. S. (1986) *The Pharaoh Smites his Enemies*, München

13) Ash, P. S. (1999), pp. 37-46; Schipper, B. U. (1999), pp. 24-28.

14) Redford, D. B. (1973), "Studies in Relations between Palestine and Egypt during the First Millenium B.C." *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 93, p. 4 and n.11; Redford, D. B. (1992), p. 310 and n. 115.

15) Montet, P. (1951) *Les constructions et le tombeau de Psousennès à Tanis*, Paris, pp. 74-75 and fig. 27, (No.714).

16) Montet, P. (1951), pp. 149-152 and figs. 54, 55, (Nos. 540, 548). 150頁の図55の一番下の銘文を図のキャプションではNo.550としているが、これはNo.540の誤りであろう。

17) Redford, D. B. (1973), p. 4 and n.11.

18) Chevereau, P.-M. (1985) *Prosopographie des cadres militaires égyptiens de la Basse Époque*, Antony, pp. 1-72.

19) この点については次の拙稿を参照。藤井信之 (2008) 「リビア王朝の地方支配と神殿」『古代史年報』属州研究会編、第6号、1-20頁。

パレスティナ戦役と関連付けて考えることは危険であろう。

第21王朝期にパレスティナ遠征があったかどうかの証明は、シェションク1世の場合と同様に戦勝記念レリーフや戦勝碑²⁰⁾が発見されるのを待たなければならないであろう。エジプトの同時代史料の検討からは、第21王朝期にパレスティナ遠征があったことを確かに証明するものは無いが、それを示唆する若干の史料があるといえることになる。なおパレスティナの諸遺跡、特にゲゼルの発掘成果も重要であるが、その成果をこの時代の歴史再構成に活かそうとする場合、未だ困難が多く解釈が分かれている²¹⁾。それゆえ今のところ確実にあったといえるのは、シェションク1世のパレスティナ遠征だけだということになる。

それではソロモンへ嫁した王女についてはどうだろうか。先にも述べたとおり、パレスティナへ降嫁した王女の存在を示すエジプト語の同時代史料は確認されていない。しかしキッチンが論じたように、史料から確認される第3中間期の王族女性の婚姻のあり方は、王女が外国へ降嫁した可能性を考えさせる。キッチンは、新王国時代には王女は外国ばかりでなくエジプトの王族以外の家系にも嫁がなかったが、第3中間期になると王女は盛んに王家以外の家系に嫁ぐようになったとし、14例を挙げる。さらにそのうちの一例では、パセバカエンニウト2世の王女マアトカラーBがリビア人オソルコン（後に即位したオソルコン1世）に嫁いでいることを挙げ、外国人にも嫁ぐことがあった例とする²²⁾。

しかしながら、オソルコンは新王国時代後半以来長らくエジプトに定住していたリビア人家系に属しており、また第21王朝自体がリビア系の王朝と考えられることから、マアトカラーBの婚姻を外国人との婚姻の例とするには無理があるであろう²³⁾。それでも、それまでは王族以外に嫁がなかった王女らが第3中間期になるとしばしば他家系に嫁ぐことになったのは事実であり、この点は重要な指摘といえるであろう。エジプト史全体を通してみても、第3中間期は王女が他家系に嫁ぐ例が突出して多い時代なのである。そしてまさに、エジプトが第3中間期であった時期に、旧約聖書はパレスティナの君侯にエジプト王女の降嫁が2例あったことを伝えているのである。この時期の一致には注目してよいであろう。

ここで検討してきたように、エジプト語史料は列王記の「ファラオの娘」に関する記述の歴史的信憑性を直接には証明しない。「ファラオの娘」をめぐる列王記の記述は今のところ参考史料に留まるといってよい。それゆえ列王記の記述に依拠して第3中間期のエジプトの衰退を論じることはできないといえる。しかし第21王朝のファラオがパレスティナへ遠征した可能性は残されているし、またエジプト王女がソロモンへ嫁しても不思議ではない婚姻政策が当時採られてもいた。「ファラオの娘」に関する伝承には、何らかの歴史的事件の記憶が含まれている可能性が依然として残されているのではないだろうか。ソロモンという王であったかどうかは全く分らないが、あるパレスティナの有力な君侯にエジプト王女が降嫁したということはあったかもしれない。従ってこの伝承を確実ではないという理由で無視するのではなく、仮に歴史的な事実を含むとした場合、エジプト史の中でどのように解釈され得るのか、考えてみるのも無駄ではないであろう。次章では、「ファラオの娘」に関する伝承が仮に歴史的事実であったとしても、そのことから第3中間期のエジプトの衰退を主張できるわけではないということを、エジプトの婚姻政策の変遷の検討を通して明らかにしたい。

20) 註8を参照。

21) たとえば Ash, P. S. (1999), pp. 118-119, n. 63を参照。

22) Kitchen, K. A. (1996³), pp. 282, 479 (Table 12), 594 (Table 12 Revised Parts). キッチンが挙げる婚姻例からソロモンへの降嫁と第26王朝期の例を引くと14例になる。

23) Ash, P. S. (1999), pp. 117-118.

2. 婚姻同盟に関する解釈の問題点

前章の最後で述べたように、現時点ではエジプト語史料から「ファラオの娘」をめぐる列王記の記述の歴史的信憑性は証明されない。しかし第22王朝のシェションク1世時代前後にエジプト王女がパレスティナの君侯に降嫁した可能性は排除できない。そこでここでは、もしエジプト王女がパレスティナの君侯に降嫁したのであれば、そのことが当時のエジプトの衰退を示す証となるのかを検討したい。

多くの研究者は、王女を外国へ降嫁させているか否かをエジプトの盛衰を考える指標としている²⁴⁾。この考え方を明瞭に提示し、大きな影響力を与えてきたのがシュールマンの研究である²⁵⁾。シュールマンは新王国時代を中心にその前後のエジプト王家の婚姻政策を分析し、エジプトが強力な国家で繁栄していた時には王女を降嫁させず、衰退していた時には王女を降嫁させたとした。シュールマンが検討したエジプト王家の婚姻の例をまとめたものが表2である。

これを見るとトトメス3世からアクエンアテンに至る第18王朝の帝国時代には、エジプト王女は一度も外国に降嫁していない。逆にエジプト王は諸外国の王女と婚姻している。しばしば引用されるアマルナ書簡の一つは、アメンヘテプ3世がバビロニア王からのエジプト王女降嫁要請を断ったことを記録している。この書簡の中でアメンヘテプ3世は、カダシュマン・エンリル1世

表2. シュールマンが検討した婚姻同盟（註4のSchulman, A. R. (1979)に拠る）

王の妹タニ	—————▶	ヒクソス王へ降嫁
王女ヘリト	—————▶	ヒクソス王アポピへ降嫁
トトメス3世	◀—————	マアエンヘト シリア(?)の君侯の娘
同上	◀—————	マアルウティト 同上
同上	◀—————	メンヌウアイ 同上
トトメス4世	◀—————	ミタンニ王アルタタマの王女
アメンヘテプ3世	◀—————	アルザワ王タルクンダラドゥの王女
同上	◀—————	バビロニア王クリガルズ2世の王女
同上	◀—————	バビロニア王カダシュマン・エンリル1世の王女
同上	◀—————	ミタンニ王シュッタルナ2世の王女ギルケバ
同上	◀—————	ミタンニ王トウシュラッタの王女タドゥケバ
アクエンアテン	◀—————	タドゥケバはアクエンアテンと再婚したと考えられる
同上	◀—————	バビロニア王ブルナ・ブリアシュ2世の王女
ラメセス2世	◀—————	ヒッタイト王ハットゥシリ3世の王女 (エジプト名はマアトホルネフェルウラー)
同上	◀—————	ヒッタイト王ハットゥシリ3世の王女
同上	◀—————	バビロニア王恐らくカダシュマン・エンリル2世の王女
同上	◀—————	北シリアのズラピの王女
サアメン	—————▶	ソロモン王

*ウガリト王ニクマド2世に嫁いだと思われる女性は王女とは限らないので除外した。

*王妃アネクエスエンアメンが迎えようとしたヒッタイト王子の例も結婚には至らなかったで除外した。

24) 註4を参照。

25) Schulman, A. R. (1979).

と考えられるバビロニア王に「古来よりエジプト王の娘は誰にも与えられたことがない」と言っているのである²⁶⁾。第18王朝時代には、エジプトの婚姻政策で王女を降嫁させる選択肢はなかったことが明らかである。第19王朝のラメセス2世も二人のヒッタイト王女と婚姻関係を結んでいる。ラメセス2世はカデシュの戦いでヒッタイトを撃破することができなかった。しかしシュールマンは、ラメセス2世がヒッタイト王女を迎えた治世34年頃には、アッシリアなどの興隆もあってヒッタイトは困難に直面しており、エジプトが優勢であったと指摘してこの婚姻実現を説明している²⁷⁾。

これらに対し新王国直前の第2中間期にはテーベ王の王女がアジア系のヒクソス王に降嫁しており、また新王国後の第3中間期にはエジプト王女がソロモンに降嫁しているとし、王女の外国への降嫁はエジプトの衰退を示しているとした。

しかしこのシュールマンの議論には問題が多い。既に指摘されていることだが、ヒクソス王へ嫁いだとされる2例の女性は、むしろヒクソス王家の女性と考えられる²⁸⁾。従ってシュールマンの挙げる例で外国への降嫁は、その歴史的信憑性が確かでないソロモンへ嫁いだ「ファラオの娘」だけということになる²⁹⁾。

さらに問題なのは、新王国時代の婚姻同盟のあり方が本当に国勢の優劣で決まっていたのかということである。確かに新王国時代のエジプトは王女を外国へ降嫁させなかった。しかしキッチンも述べるように、そもそも新王国時代にはエジプト国内であってもエジプト王女は王家以外の他家系に降嫁することはなかったのである³⁰⁾。確認される例外はラメセス2世の妹ティアの場合だが、彼女は王女とされることなく「王の妹」とだけされている。キッチンが述べるように彼女の婚姻はラメセス1世の即位前、つまり第19王朝成立以前のことだった可能性がある。この場合、この婚姻が成立した時には、ティアは王族女性ではなかったということになる³¹⁾。先に紹介したようにアメンヘテプ3世は「古来よりエジプト王の娘は誰にも与えられたことがない」と言っているが、これは当時のエジプト王家の婚姻政策に基づいての発言であり、諸外国との婚姻同盟もこの当時のエジプトの婚姻政策に基づいて遂行しようとしていただけではないだろうか。新王国時代のエジプト王は王女を他家系に降嫁させることはないが、自らは時に他家系から王妃を迎えていたのである³²⁾。

ラメセス2世に王女を二人降嫁させたことが知られるヒッタイトの婚姻政策も興味深い。ヒッタイトの外交文書を集めた史料集からヒッタイト王女の外国への降嫁を調べてみたのが表3である³³⁾。このようにヒッタイト王は宗主国として宗主権下に入った国々に盛んにヒッタイト王女を降嫁させている。ヒッタイトは、属国を支配するために、その王とこのような婚姻同盟をしばし

26) Moran, W. L. (1992) *The Amarna Letters*, The Johns Hopkins U. P., p.8 (EA 4)

27) Schulman, A. R. (1979), pp. 190-191.

28) Ash, P. S. (1999), pp. 114-115; Dodson, A. and Hilton, D. (2004), *The Complete Royal Families of Ancient Egypt*, London, p.115.

29) ヘロドトスもエジプト第26王朝のアマシス王が先王アプリアスの王女をベルシア王のもとに嫁がしたという話を伝えている(ヘロドトス『歴史』3.1)。しかし、この婚姻も現在のところ同時代史料から確認できない。

30) Kitchen, K. A. (1996³⁾), p. 282.

31) Kitchen, K. A. (1996³⁾), p. 282, n. 229.

32) たとえばアメンヘテプ3世の正妃ティイは王家の出ではなくイウヤとチュウヤの娘である。

33) Beckman, G. (1999³⁾) *Hittite Diplomatic Texts*, Atlanta, pp. 27, 31, 44, 74, 101, 105. なおラメセス2世に嫁いだヒッタイト王女については以下を参照。Schulman, A. R. (1979), pp. 186-187, n. 41; Kitchen, K. A. (1982) *Pharaoh Triumphant: The life and times of Ramesses II*, Warminster, pp.83-88, 92-95.

表 3. ヒッタイト王族女性の降嫁（註33の書物に拠る）

シュッピルリウマ1世の姉妹	—————▶	ハヤサ国のフッカナへ
シュッピルリウマ1世の王女	—————▶	ミタンニ国のシャッティワザへ
シュッピルリウマ1世の王女ムワッティ	—————▶	ミラ・クワリヤ国のクバンタ・クルンタへ
ムワタリ2世の姉妹マッサヌッティ	—————▶	セハ河国のマツツリへ
ハットゥシリ3世の王女	—————▶	エジプトのラメセス2世へ
ハットゥシリ3世の王女	—————▶	エジプトのラメセス2世へ
ハットゥシリ3世の王女ガッスリヤウィヤ	—————▶	アムル国のベンテシナへ
トウトハリヤ4世の姉妹	—————▶	アムル国のシャウシュガ・ムワへ

ば結んだ³⁴。エジプトとは全く異なる婚姻政策を持っていたのである。ヒッタイト王がエジプトへ王女を嫁がせたのは、自国の婚姻政策のあり方に基づいての判断だったのではないだろうか。このように考えると、オリエント世界での婚姻同盟のあり方は、シュールマンの指摘とは異なり、国勢の優劣以上にそれぞれの国が本来持っている婚姻政策のあり方に影響されたと考えられるのではないだろうか³⁵。

それでは「ファラオの娘」がパレスティナの君侯へ降嫁したかもしれないと考えられる第3中間期のエジプトの婚姻政策はどのようなものであったろうか。先にも述べたように、この時期には王女がしばしば他家系に降嫁するようになった。第3中間期の諸王はエジプト各地の有力家系に王女を降嫁させることにより婚姻同盟を結び、エジプトを支配しようとしていた。軍政官としての王族の地方への派遣と並んで、王族女性を降嫁させる婚姻同盟は各地方を支配下におく有力な手段とされていたのであった³⁶。もしこの時期にパレスティナへ王女が降嫁したのであれば、それはやはりこの当時のエジプトの婚姻政策に基づいて遂行されたということになるだろう。つまりエジプト国内と同様にパレスティナを支配するために王女を降嫁させたということになるのである。王女との結婚は、少なくともエジプト側の立場では、エジプト王を頂点とするエジプトの支配体制に組み込まれることを意味していた。もちろんエジプト王女を受け容れる側には別の思惑もあったであろう。いずれにしても、第3中間期にエジプト王女がパレスティナの君侯へ降嫁したのであれば、それは渋々王女を差し出したというのではなく、むしろパレスティナを支配下に組み込むために積極的に降嫁させたということになるであろう。列王記の「ファラオの娘」に関する記述は、前10世紀のエジプトが衰退していたことを示唆する参考史料というよりも、むしろこの時期にエジプトが軍事力の行使も含め積極的にパレスティナ進出を試みていたことを示唆する参考史料ということになるのである。

先に紹介したニーマンは、列王記の記述の独自の解釈と新王国時代のエジプトによる征服地支配の方法を踏まえて、シェションク1世がパレスティナを征服し、ソロモンはその支配下で総督の一人となったと考えた³⁷。新王国時代におけるエジプトの征服地支配は、親エジプト派の諸侯を現地の支配者に任じるが、しばしばその息子を人質としてエジプトへ連れ帰り、エジプトで教

34) Cf. Bryce, T. (1998) *The Kingdom of the Hittites*, Oxford U. P., p. 51.

35) 主に西アジア側の慣習から議論するマイアーも、ヒッタイト王やバビロニア王がエジプトへ王女を降嫁させたのは、エジプトと異なり西アジアでは宗主権下に入った国々に王女を降嫁させていたからだと論じている。Cf. Meier, S. A. (2000), "Diplomacy and International Marriages," in Cohen, R. and Westbrook, R. (eds.) *Amarna Diplomacy*, The Johns Hopkins U. P., pp. 165-173, esp. pp. 170-172.

36) 差し当たり、上エジプトの中心であるテーベをめぐる支配のあり方について論じた以下の拙稿を参照。藤井信之（1999）「リビア王朝の支配とアメン神官団」『西洋史学』日本西洋史学会編、192号、23-47頁。

37) 註9を参照。

育をしたうえで、父の後継者として送り返した³⁸⁾。エジプトへの亡命とされるエドムのハダドの話は、あるいは前10世紀にもこうした人質政策があったことを形を変えて伝えているのかもしれない。しかしソロモンへ嫁いだ「ファラオの娘」の記述は、本論で検討してきたように第3中間期のエジプトの支配のあり方と合致している。従ってニーマンとは異なる根拠、すなわち当時のエジプトの婚姻政策のあり方から、列王記の「ファラオの娘」に関する記述は、当時のエジプトが再びパレスティナを支配する意図を持っていた可能性を示すもの、ということができる。ただし繰り返しになるが、列王記の記述の信憑性は同時代史料によって証明されていないし、当時のパレスティナとエジプトの関係を示す同時代史料もほとんど存在しないことから、ここでの議論も可能性の域を出るものではない。もちろん列王記の記述が前10世紀におけるエジプトのパレスティナ支配を証明するわけでもない。さらなる真相の解明は、新たな史料の発見を待たなければならないであろう。

おわりに

本論では、ソロモンへ嫁いだ「ファラオの娘」に関する列王記の記述がエジプトの衰退を示す証になるかどうかを、特に当時のエジプトの婚姻同盟をとまなう支配体制のあり方と関連付けて考察した。エジプト側の同時代史料の検討からは、この列王記の記述の信憑性は証明されなかった。したがって列王記の記述は参考史料ということになる。それゆえこの記述に依拠して、エジプトの衰退を論じることはできない。しかしながらこの記述が何らかの事実を伝えている可能性も今のところ否定できない。前10世紀にエジプト王女がパレスティナの君侯へ降嫁した可能性は無いわけではないのである。ただその場合であっても、王女の降嫁はパレスティナ支配の一環であったと考えられ、エジプトの衰退を示すものではないといえる。新王国時代と第3中間期では、支配のあり方が異なっていたのであり、そのなかで婚姻政策のあり方も変化していた。新王国時代の婚姻政策と異なるからという理由で衰退を論じることはできないのである。前1千年紀のエジプト史の問題は、ここでの検討のように、新王国時代までのエジプトとの比較ではなく、同時代の歴史的文脈のなかに位置づけて考察しなければならないであろう。このような作業の継続が、衰退史観を脱却した前1千年紀の新たな歴史像を取り結ぶことにつながるであろう。今後の課題としたい。

38) 歴史学研究会編(2012)『世界史史料』第1巻(古代のオリエントと地中海世界)岩波書店、131-132頁 [85. トトメス3世の軍事遠征と対外政策(前15世紀)〈森際真知子訳・解説〉]を参照。